

学校欠席者情報収集システムを活用した 麻しんおよび風しん早期探知・早期対応

渡邊 美樹¹⁾, 高木 英¹⁾, 永田 紀子²⁾
長洲 奈月³⁾, 栗田 順子^{3), 4)} 菅原 民枝⁴⁾, 大日 康史⁴⁾

1) 茨城県衛生研究所企画情報部 (感染症情報センター)

2) 茨城県衛生研究所ウイルス部

3) 茨城県保健福祉部保健予防課

4) 国立感染症研究所感染症疫学センター第一室

【目的】

麻しんおよび風しんは感染症対策上特に重要な疾患として特定感染症予防指針に定められており、小児における学校等の集団生活の場においては早期対策が非常に重要となるため、1例でも探知した場合の対応が必要である。茨城県では、学校欠席者情報収集システム(保育園サーベイランス含む。以下、システムとする)を2009年(保育園は2011年)から導入し、そのシステムを活用した、県内における早期探知、早期対応の体制を整備しているもので報告する。

【方法】

学校等の施設で麻しんおよび風しんによる欠席情報がシステムに登録された場合、即座に行政関係者(市町村教育委員会や保育主管課、保健所、県庁、国)にその情報が送信される。行政関係者は、その段階で探知となり、保健所から学校等への問い合わせや医師への確認等が行われる。また、必要に応じて疫学調査や検査が実施され、確定した症例については、感染症発生動向調査事業に基づき医師から発生届が提出される。今回は、2013年と2014年にシステムから探知した症例の登録状況およびその後の報告状況を調査した。

【結果】

システムに登録された症例は、全て登録のあった当日に、保健所から医療機関または学校等の施設に内容の確認が行われた。システムから探知した症例は、麻しんおよび風しんがそれぞれ2013年は5件、56件、2014年は1件、19件であった。そのうち、調査(必要に応じて衛生研究所での検査等)を実施した結果、確定した症例は2013年が0件、7件、2014年が0件、1件であった。これらは、保健所に発生届が提出され、検査結果は学校等の施設に情報が還元された。

【結論】

システムを活用したことにより、早期探知、早期対応ができたことは感染症対策上非常に有用であった。また、結果が速やかに還元されたことから、学校等施設内での対策および医療機関から報告される麻しんおよび風しんの確定診断に役立った。システムを活用するためには、施設からの入力が必要であるため、今後も安定した運営ができるよう、学校や

保育園等の担当者、あるいは行政関係者や医師等を対象とした研修会を毎年開催し、精度を維持していくことが重要である。今後も学校等の施設や医療機関、行政関係者等の関係機関と連携をより深め、感染症対策に役立てていく必要があると考える。